

気が弱いばかりに

口演 茅々斎かちかち

**気**が弱いばかりに大それたことをしてしまおうというのはよくあるよう  
です……。

この話の舞台は北宋の都、開封（かいほう）でございます。宋の都は、北宋時代の開封と、南宋時代の臨安（りんあん）がございましたが、どちらもわが江戸のようであったと思つていただいてさほど見当違いではありませんでしょう。

開封は長い歴史のある町ですが、宋の都になるまでには、相国寺というお寺の存在は大きかったようです。その境内で市が開かれ、舟運に恵まれた土地柄で自ずと多くの商人が集り、物流の中心として発展し、後に百万を超えたといわれる都の大人人口を養い、国家経営の基盤を支えるに至つたのでした。

唐の都の長安では、商人の活動は東西二ヶ所の市場に限られていました。宋の都にそのような制約はなく、商人は自由にそこかしこに住んでおりました。その点だけでも、宋の都は庶民が活き活きと暮らせる町であり、しかも、唐の時代にはなお幅をきかせていた貴族というものが、宋の時代には消え失せていました。朝廷に居並ぶお偉方も血筋で選ばれるのではなく、実力も

のをいいました。難しい試験である科挙に合格しなければ、いくら誇るべき家柄であつても出世できません。逆に、科挙に合格すれば、貧乏のどん底から宰相に昇り詰めることも可能でした。

科挙というのは、現代でいえば、国家公務員試験と司法試験と国会議員選挙を兼ね合わせたようなものであつたと思つていただいてよろしいでしょう。国会議員には任期がありますが、科挙は一度合格すればいいのです。まことに大きな意味をもった試験でありましたから、科挙にまつわる物語というのが無数にございました。

「饜飩」（れんせい）という言葉がありました。古くは皇帝の娘の婿さん指したのですが、宋代になりますと、科挙に合格したばかりの者を娘婿に取るという意味になりました。「饜」という漢字は、肉を小さく細切れにするという意味で、ある皇帝が細切れ肉の料理が大好きであつたために、その料理は皇帝専用とされたことから転じて、「饜飩」は皇帝のもので、他の者が手出ししてはならない婿さんということになったようです。

宋の時代にも、超高級官僚には例外的に皇帝の恩沢として、その子弟に無試験で官職が授けられる特典がありました。ただしある一定のところまでしか昇格できない決まりがあつて、宰相の子孫といえども、科挙に合格できなかったら、三代目、四代目となりますと自ずとジリ貧になつてしまふのでした。そこで、息子が無理なら、優秀な男を娘の婿として取り込んでしまおうというのがこの時代の「鬻婿」でありました。

科挙の合格者が決まりますと、皇居の門には、合格者の名を記した掲示板でありますところの榜（ぼう）が掲げられます。榜に我が名を見つけて、喜びの余り正気を失わんばかりになつてゐる若者を掴まえ、正常な判断のできない状態のうちに、婿として困い込んでしまおうと、榜の前では、「鬻婿」の争奪戦が繰り広げられました。

ある年の試験でございます。榜を見上げて呆然と立ち尽くす一人の青年がおりました。まこと姿形のよい若者でありましたから、「あれがいい。逃したら承知せんぞ」。

指示を受けた初老の男はそつと歩みより、

「みごとに合格でございますな。おめでとうございます」。

その声に、振り向きもせず、

「忝くも天子様にお選びいただきまして」。

言葉を口にしますと、堰を切つて喜びが溢れ出て、まさに天にも昇る心持ち、手足の置きどころがありません。

何を聞かれ何を答えたのかもわからず、たちまち十数人の屈強な男が寄つてきて、あわあわ言ううちに担ぎ上げられ、そのまま連れて行かれましたのは大きなお屋敷にございます。

さすがに青年も事情がわかつてまいりまして、これが聞くとこの「鬘婿」で、まさしく自分は合格したのだと、いっそう嬉しくなりました。

この家の婿殿になる者を見ようと、青年の周りに何重もの人垣ができています。人々の誉めそやす声が耳に入り、青年はもう有頂天で、自分をいっそう立派に見せようと、誇らしげなポーズを作つて、あちこちを見回します。

しばらくすると、静謐の聲がして、階の上に衣冠を正した人物が現れます。この家の主人でありましょう。衣服からして、朝廷に並ぶ大官と知れます。青年はここが大事と、優雅な振る舞いを心掛け、その高官を拝します。

大官は祝いの言葉を述べ、

「それがしに一人の娘がおります。親の口から言うのも何であるが、美醜をいえば貴殿を失望させることは決してなく、才をいえば貴殿に釣り合わぬものではあるまいと思えます。願わくは、我が娘を貴公の嫁としてもらってほぐださるぬか」。

青年は満面の笑みを浮かべ、

「わたくしは、田舎の町の至って貧家の者でありまして、科挙に合格しましても、都の右も左もわからぬありさまであります。このような立派な一門に身を託すことができましたならば、望外の幸せにございます」。

「それでは承諾してくださるか」。

青年は、そこではたと膝を叩き、

「と申したいところではありますが、即答をしかねる事情を思い出してごいます」。

「それは何であるか」。

「わたくしは田舎より一人で出てまいりましたので、郷里に戻って相談をせねばならぬ者もいるのでございます」。

「成程、それはもつともである。で、それはお父上であるか。お父上と御相談なされるのならば、それがしから一筆お手紙をお書きしようか」。

「いいえ、父は先年亡くなりましてでございます」。

「では、母君か」。

「いいえ、母はさらに昔に亡くなりましてでございます」。

「では、父母に代わって養ってくれる伯父や伯母であろうか。誰であれ、それがしからたつてのお願い申そう」。

「しかし、わたくしの思いますに、なかなか難しい相手にございます」。

青年は頭を掻きます。

「して、誰であるのか」。

「こちらの婿にしていたきますには、やはり、田舎の妻の許しが必要ではないかと」。

この青年は妻のあることを正直に明かしたのですが、隠して二重に結婚したというようなこともままあつたようでございます。

**こ**こにご登場いただきますのは王震屈（おう しんくつ）先生。都の片隅の、江戸の長屋のようなどころの借家住まい、子どもたちを集めて読み書きを教え、わずかな授業料を得て細い煙を上げています。歳のころなら五十前後、独り身でありますから、いかにも世渡りが不得手な貧乏学者に見えますが、実のところはなかなか癖のある人物にございます。

もとを尋ねれば、いまの暮らしからは想像もつかない豪商のお坊ちやま。住んでいた屋敷は、さる高官を金で追い出したものというほどに、父の代に



は奢りを極めまして、王震屈は来る日も来る日も遊蕩三昧、遊びのついでに洒落で学問も齧ったのが、現在の飯の種でございます。親が莫大な財産を遺して死にますと、しめたとばかりに金を使いまくり、たちまち全てを失ってしまいました。ここからがこの先生の面白いところ、そこらのやわなお坊ちやま連中とは違ひまして、危ない橋を平然と渡って、濡れ手で粟の大儲け、それで家業を再興すればよろしいのに、また使つてしまい、急上昇と急降下を何度繰り返したことやら。世の中の裏も表も知ったあげくに、何もかもすばつと捨てて、しかつめらしい顔をこしらえ、子どもたちに人の道などを説いているのでございます。

今日も、いつものように『論語』や『漢書』から一節を拾つて教え、昼時分に子どもたちが揃つて丁寧挨拶をして帰りますと、あとは先生一人だけ。午後はこれといつてすることもなく、そこは先生らしく、真四角な文字の並んだ書物を広げるなどしております。

そのうち日がかげつてまいりましたので、そろそろ夕餉の仕度でもと、土

間に下りて火をおこし始めますと、

「先生、いらつしやいますでしようか」。

戸口で声がいたします。

ちようどうまい具合に火がおころうというところ、ここで立つのは邪魔くさく、ふうふう吹きつつ、

王「どなたですか。どうぞ、そのまま開けて勝手にお入りください」。

「よろしゅうございましょうか。では、失礼いたします」。

すつと開けて顔をのぞかせましたのは、痩せた三十歳ばかりの男。

先生、肩越しに振り返り、

王「おやおや、これはこれは、お珍しい、陳秀才さんではありませんか」。

あわてて立ちまして、

王「いやはや、これはこれは。それがしの方から参らねばと、今日こそは今日こそはと思いが、つい何だかんだとありまして、すつかり日が経つてしまいました。いやはや、そこへ、あなたさまの方からこうしてお越しにな

られますとは。どうもいけませんな。いやあ、申し訳ない。大変遅くなりしましたが、このたびは大願成就。まことにおめでとうございます。お祝い申し上げます」。

先生、深々と頭を下げます。

陳「どうも、恐れ入ります。どうか、そのようになさらずに。すべては先生のお力があつたればこそです。そのお礼を申し上げに、一日も早くに伺わねばならなかったのはわたくしの方です。つい何だかんだとありまして」。

と、先生と同じようなことを申します。

王「何をおっしゃいますか。あなたさまはもう立派なご身分のお方。私なんぞは、先生と呼んでいただくに値しません。このような小汚い路地にわざわざおみ足をお運びいただきました。ともかく、どうぞ」。

と、中へ導きましたこの男、陳淑文(ちん しゅくぶん)と申します。このたび、科擧の難関を突破し、首尾よく最初の赴任地も決まった新米のお役人様でございます。合格を掴み取るまでには十年越しの艱難辛苦がありました。

王先生は相手の立場が変わりましたので腰低く接しておりますが、実のところは、陳淑文に対していささか気分を害しております。陳淑文夫婦がまったく身寄りもなく、着の身着のままのありさまで都にきたころから、先生は蔭で随分と支えてきたのであります。ですから、合格発表後に、真っ先に礼を言いにくるだろうと思っていたのでございます。

陳淑文も、氣まずさを感じているのでしよう、一步入っただけでもじもと、

陳「つい何だかんだとありまして。先生には、本当に、感謝の気持ちでいっぱいです。それでいながら、今日まで参らずにいたしましたのは、言い訳になります。実に困りましたことに、その日その日の算段に、ただただ右往左往するばかりで」。

王「みごと合格され、得手に帆を揚げて、何の心配もいらぬのではありませんか」。

陳「わたくしも、合格したら、そうなるとばかり思っていました。ところが、

実際はそうではなく、次から次へと心配だらけなのです。ほとほと困りました」。

うなだれる陳淑文を見ますと、以前の粗末な衣服のままです。どうやら何かありそうです。

王「いつまでも戸口にお立ちになっておらずに、どうぞこちらへ。いま火をつけたばかりですが、茶でもおいれしましょう。よろしかったら、その心配とやらをひとつお聞かせいただけませんかでしょうか」。

「ついつい親切に言ってしまうのは、これまでも陳淑文を助けてきたからでございます」。

陳「ではお言葉に甘えまして」。

中に入り、

陳「ひとえに先生のお力があつたればこそ、試験にも受かりまして、そのお礼も申し上げないうちから、またつまらぬことを持ち込んではどうにも申し訳ないやら恥しいやらで、顔も見せられない思いです。しかし、この都で頼

れるのは先生しかおられないのです。どうか、どうか、助けていただけませんかでしょうか。

さすがのようにして頭を下げます。

王「ともかくそこにおかけください」。

先生は、ふっとため息をつきます。どうやらまた面倒を見なければならぬ風向きです。

陳「とにかく、やつと合格し、これで何もかも安心だと、家内と二人、天にも昇る気持ちで喜んだのもつかの間、いきなり困りましたのは、お祝いの席に着て参るものです。着るものといえば、この十年間、夏と冬で順繰りに替えていたものしかありません。これが二つのうちの一つ。まさかこれで華やかなお席に出られませんから、家内があちこち駆けずり回り、どうやらさまになりそうなものを借りてきてくれました。しかし、それを着ていきますと、顔から火が出そうになりました。他の方々は、見るからに仕立て下ろしの上等な服をお召しで、損料貸しのしみだらけのものなどわたくし一人です。も

う恥ずかしくて恥ずかしくて、隅の方で小さくなっているしかありませんでした」。

王「晴れて試験に合格したのでしよう、服くらい誰だって貸してくれましように、どうされたのです」。

陳「なかなか、そうもいかないのです。これまでの借銭がそれこそ山のようにありまして。どこへいってもいい顔しません。服はほんの一例でして、何だかんだともものいりで、逆に入ってくるものは何もありません。他の方々は、裕福なご親類がいたり、お祝いをたくさん頂戴したり、早速によい縁談がまとまったりと、何も困ることはないのに、わたくしには一人の親類もおりませんで、広い都に、先生をおいては頼れるお方もなく、以前にも増して苦しい算段をしなければならぬのです」

泣き出さんばかりの陳淑文に、王先生は苦りきった顔で、

王「私も昔でしたらな、すぐにお祝いをお届けして、あなたさまにも、立派な服の二着でも三着でもお召しいただけるようにしてさしあげるのが、

いまではこのありさまですからな」。

陳「どうか、気を悪くなさらないでください。先生からお祝いを頂戴するとか、そんなさもお願いに参ったのではないのです。今日まで、何とかして、先生の手をわずらわさずに、家内と二人で、わたくしどもなりに頑張ろうとしてまいりました。それで、どうかこうにかここまで乗り切ってきました。しかし、これでもう精一杯です。と申しますのも、このたび最初の任地が決まりました、それはまことに有難いことではあるのですが、たいそう遠い南の町でして、聞きますと、そこに着くまでの費用は自弁なのだそうです。向うでの仕事が始まると、初めてお上からのお手当てが頂戴できるのです。それを聞いて家内ともども驚いてしまいました、どうやりくりしたらいいものか、ほとほと困ってしまったのです」。

王「あなたさまはもう立派なお役人様ではありませんか。いままでと違い、前借りでも何でも、いくらでもできましように」。

陳「申しました通り、借銭の山があります。どなたとも、合格したら必ず



返しますとの約束だったものですから、それをどうもしないうちに、重ねてというのがまことに難しいのです。家内が掛け合いにいつても、『合格したのですからいくらでも算段できましように。まずは耳を揃えて返してください。話はその後です』と言われてしまうのです。『任地に着いたら、お金を送りますから』と申しても、『都の近くならまだしも、そんな遠くでは、催促にも行けません。まったくあてになりません。向うは悪い病気が多いというではありませんか。あっちで死んでしまったらおしまいです。とにかくいままでの分をそっくり返してください』と、厳しくいわれるばかりです。路銀が用意できずに、まさか、夫婦して物乞いをしながら向こうにいくわけにもまいりません。もしも期日まであちらに着けませんと、せつかくの職さえ失ってしまいます。苦勞のすべてが水の泡です。家内とも思案投げ首で、ほとほと困り果て、ここはもう先生にご相談してみるしかあるまいということになりまして、それで伺ったという次第なのです。近ごろ難儀なご相談でまことに申し訳ありません」。

王「伺つてみれば、事情もあるようですが、どうもあなたさまは、昔から不器用でいけない。勉強ばかりしているあなたさまですから、世渡りが下手なのはむしろ愛すべきと、それがしも陰ながら応援してきました。お内儀さまの涙ぐましい内助の功にはいつも頭が下がります。それがしも貧乏暮らしに落ちつつも、微力ながらお助けしてきました。しかし、晴れて合格して、どうにかならないのですか」。

先生はやや突き放したように言います。

陳「親を亡くし、それこそ物乞い同然のありさまで都にきましてから、先生には本当にいろいろと助けていただきました。どれほどお礼を申しても足りません。その上で、困ったときにだけお願いに上がって、何とも申し訳ありません。でも、わたくしどもとしては、すがれるのは先生にしかないのです。どうかお願いいたします。助けてください」。

王「助けてくださいとやみくもに言われましてもな。そりゃあ、あなたさまのことですから、何とかしてさしあげたいが、それがしも、あなたさまが都

にこられた当座の十年前であれば、気前よくぼんと出せたでしょうけれど、いまは手元にあるのは、子どもの小遣い銭にも足りないほど。惜しんで隠しているではありません」。

陳「路銀を先生にご用立ていただくなどと思つてゐるのではないのです。そんな凶々しいことは口が裂けても申せません。どうにかするお知恵を拝借できないものかと」。

王「知恵ですか。不器用でいけないと、あなたさまをけなしておきながら、こつちに知恵はありませんでは、はなはだ格好がつかないところではあります。金の算段となると、なかなかの難問ですな」。

先生、昔なら一晩で使つてしまつた金がここにあればと思います。

陳「全く困り果てまして、夜も眠れず、昨晚などは、夫婦していつそ死んでしまおうかと相談するありさまでした」。

王「死ぬですと。科挙に合格し、嬉しさの余り死んでしまつた人はいるようですが、任地に行く旅費が工面できなくて死んだというのは聞いたことがあ

りません。御夫婦で死ぬ相談をしたと聞いては、何か知恵を搾り出さなくてはなりませんまい。」

陳「死のうと思ひ始めますと、そればかりに頭にいつて、死ぬしかない、死ぬしかない、考え続けてしまうのです。先生にご迷惑をおかけするよりは、やはり死んでしまおうと、ここにくる道ながらも何度も何度も思つたのです。」

王「死ぬ死ぬと、そればかりとは穏やかでない。これであなたさまに死なれては、それがしの夢見もよろしくない。そう思ひ詰めずに、ひとまず茶でも飲んで、気を静められてはいかがでしょうか。」

陳「はあ」。

情けなくうなだれる陳淑文に、この男を助けなければならぬ義理などないはずなのにと思ひつつも、見放しては己の沽券に関わるとも思つたのでございます。

茶をいれつつ、ふと浮かんだことがあります。しかし、陳淑文にはいいのやら悪いのやら。

王「いやあ、こればかりはいけない。駄目だ、駄目だ」。

と、独り言。

陳「何でしょうか」。

王「いえ、何でもありません」。

陳「駄目だとかおっしゃいましたが、駄目でもともとです。もしも何かあるようでしたら、どうかお聞かせください」。

陳淑文が目の色を変えたのを見て、先生は、不器用で気の弱いこの男がどう出てくるのか試してみたくなり、

王「申し上げてもよろしいのですが、どうか、気を悪くなさいませんように。死ぬとおっしゃるので、ふと思いついたままで。あなたさまには立派なお内儀さまがいらっしやいます。もしもそうでなければあなたが悪い話ではないのです。長年ご苦労をともにされたお内儀さまがいらしては、まことに詮無い話です。やはり、これは言わずにおきましょう」。

先生はわざともつたいをつけます。

陳「家内がいてはまずいとは、どのような話なのでしょうか」。

王「まあまあ、お茶がはいりました。貧乏暮らしに陥っても、茶を飲むこの習慣は変えられないものですな。茶をやめれば、少しは暮らしも楽になるでしょうし、書物だつて買ひ足せるのでしようが、若いころからのこの贅沢だけは抜けません。無理をしてでも、ついよい茶を手に入れたと思つてしまひます」。

先生が差し出す茶に手を伸ばしつつも、陳淑文はじれったい様子で、

陳「どうかいまのお話をお聞かせいただけられないでしょうか」。

王「苦楽をとにもされてきたお内儀さまがいらして、こればかりはとんでもない話です。変なことを聞かせるなど、お叱りにならないでくださるのならば」。

陳「先生を叱つたりなど決してありません」。

王「やはりこれは駄目でしょうな」。

陳「駄目なら駄目で仕方がないです。後は死ぬだけなのですから」。

王「そこまでおっしゃるのならば申しましようか。あなたさまも、鬻婿という言葉があるのは聞き及びでしょう。この話は鬻婿に似て、向こうには舅も姑もいないという、至って気楽な話です」。

陳「どういうことでしょうか」。

王「かれこれまだ十日ほど前でしょうか、劉婆（りゅうばあ）さんが申しますには。あなたさまも、すぐ向こうの路地に住む劉婆さんはご存知でしょう。効きもしないまじないの札を売ったり、何が本業ということもなく、世間の噂を飯の種に変えているような女ですが、それが言うには、ちよつとした小金を貯めた女が婿を捜している。いい婿を世話できたら、いい稼ぎになりそうだと、獲らぬ狸の皮算用。困った婆さんです。あなたさまは勉強一筋で、聞いたことはしないでしようけれど、崔蘭英（さいらんえい）といえは、少しばかり名の知れた娼妓で、まだ一年もならないでしょうが、運よく、大金を払って娼籍から抜いてくれる旦那がおりました。それがさらに運よくといっては何ですが、ぼっくり死にまして、家と金が残って自由の身。これで一人で

いても金がなくなるだけだから、できたら今度は立派なお役人様の嫁にでもなつてみたいものだ。都では素性が知れているから、どこか遠く離れた場所について、しばらくしてから都に戻ってくれば、もう立派な奥様として誰からも何も言われなくなるだろうと。そのようなことをその蘭英さんは言っているのだそうです。運のいいのが三度も四度も続くはずがないと、劉婆さんと笑い合つたのですが、もしもあなたさまが独り身なら、蘭英さんの願ひもまるつきり叶わないものではないのですが。こればかりはどうも」。

と、陳叔文の顔をじつと見ますと、

陳「そちらのお方のお金というのはどれくらいあるのでしょうか」。

王「そこまでは知りません。蘭英さんほどの娼妓なら、祝儀としてもらったものだつてたんまりあるでしょうし、聞くところでは、旦那が買ひ与えた家もなかなかのものらしいです」。

陳「婿はいまも見つかつていないのでしょうか」。

王「あれから十日ばかりですからな」。



陳「その人はどちらに住んでいるのでしょうか。遠くですか」。

王「身を乗り出してこられましても、あなたさまには大切なお内儀さまがいらっしゃるのですから、これはない話です」。

陳「それはそうですね、話を聞くだけならいいものではありませんか」。

王「家は遠くではないです。劉婆さんがひとつ走りすれば、訳ないです」。

陳「そうですね。ここは、何といえますか、器用に考えたら、何かしらいい知恵が出てくるのではないのでしょうか」。

王「ほう、器用にですか」。

陳「ええ、器用にです。どうなのでしょう、たとえば、もしもです、家内にいなくなってもらえたら、わたくしでもその女の人の婿になれましようか」。

王「いなくなってもらうとは、どういうことですか。ご離縁なさるのですか」。

王「ここまでご苦労をとみにされ、いよいよ晴れてお役人になって、それでご離縁とは、不人情すぎやしませんか」。

陳「離縁といいますが、あれも親戚も何もない身ですから、いくところが

ありません。かわいそうです」。

王「それでしよう。ですから、これはない話なのです」。

陳「一人にするのはかわいそうなので、いつそのこと、死んでもらって」。

王「何をおっしゃいますか。とんでもないことです」。

陳「しかし、夫婦して死のうと相談しているのです。このままでは二人で死ぬしかないのです。やはり、死にましよう」。

王「死ぬ、死ぬとおっしゃらずに、冷静になつてください。死ぬ気なら、いくらでも他に手がありますましよう」。

陳「どういう手があるでしようか」。

王「そこは、器用に考えたらいかですかな」。

陳「死なないまでも、家内にしばらくいなくなつてもらえばいいのではありませんか。いや、そうではありません。離縁もせず、家内はいいのです。

あちらの女の人に、家内がいることが知れなければそれではありませんか」。

王「ほほう、お内儀さまのことは内緒にしておいて、あちらの婿になるというのですか。劉婆さんなら、うまく話を付けてくれないとも限りませんが、それで、お内儀さまの方はどうなさるのですか。崔蘭英と一緒にいるから、しばらくいなくなってくれと頼むのですか」。

陳「そんなこと家内にはとても言えません」。

王「でしような。長年の苦勞をともしてきたのですから」。

陳「家内にも内緒です。あちらにも知らせず、家内にも知らせず、それで双方ともよくはないですか。家内は都に残り、わたくしだけがその女の人と任地にいくのです」。

王「はあ、なるほど」。

陳「二人して死ぬよりはよほどいいと思うのです。わたくしも器用にならなければいけません。そうではありませんか」。

陳叔文がすっかりその気になっているので、

王「どうもこの話はよろしくない。お内儀さまに申し訳ない。やめにしまし

よう。聞かなかったことにしてください」。

陳叔文はあわてて、

陳「もう日数がありません。任地までの道のりを考えますと、数日のうちには都を発たないとならないのです。期限までに向こうに着けないと、職を失いかねません。いまの話だけが頼りです。これが駄目なら、死ぬしかありません。ですから、どうか、劉婆さんと呼んでください。先方にすぐに話をしていただけないでしょうか」。

王「いますぐにですか」。

陳「だってこれしかないのですから」。

王「これはお聞かせしない方がよろしかったですか」。

王先生はそう言いながらも、これでどういうことになるのか、少なからず楽しみになります。夫婦して死ぬよりはよく、崔蘭英の望みも叶い、三人にとって悪い話ではないのかもしれないかもしれません。

**劉婆**さんはほくほく顔でたちどころに段取りをつけまして、夕暮れどき、表通りの茶肆の奥まった部屋で崔蘭英がくるのを待ちます。王先生と陳淑文は薄い壁の向こうの隙間に潜み、劉婆さんと崔蘭英のやりとりを盗み見ようというしかけ。

「こちらでよろしかったでしょうか」。

崔蘭英が到着しますと、その声だけで、早くも評判の美しさが知れます。小さな穴から先生が覗きますと、さすがに名のある娼妓であっただけのこと、年齢が少々かさんで、以前のような派手な化粧はしていなくても、そこらの女とはまるで比べものになりません。代わって陳淑文が穴に目を付けますと、壁にはりついて動かなくなりませす。

劉婆さんの口のうまいことうまいこと、とんとん拍子に話が進みます。それを聞く陳淑文の息遣いが次第に荒くなります。

王先生はこっそり笑います。勉強ばかりであった陳淑文も壮年の男であり

ますから、崔蘭英の美しさに心惑うのも不思議ではありません。先生は人生経験豊かでありますから、突如として娼妓に狂った男をこれまで幾人も見ております。

劉「さんざんいいことばかり並べて、後になって、違っていたではありませんか」と、あんたに文句を言われるのも嫌だから、正直に言っておくと、あたしが一番心配しているのは、あの方とあんたとが気が合うのかどうかってこと。だって、何しろ、あの方は学問しか知らないのです。あんただって昔の商売で、うぶな科挙の受験生を見る機会があったらうけれども、あの方はいまだきそんな人がいるのかと驚くばかりの世間知らずというか、純情というか、試験には合格したけれど、これからお役人さんとしてちゃんと勤まるのかどうか、それさえ心配なのだそうです。一緒になって妙な苦勞をするかもしれない。それに、あんたの前の旦那ように遊び人ではないのだから、一緒に暮らして退屈で退屈で、あんたとしては少しも楽しくないから、いつまで経ってもお役人さんとして出世しなくて、あんたはじりじりするよ

うになるかもしれない。相性というのはあなどれない。合わない者どうして暮らすほど難しいことはない。あの方にもあんたにも親も親類もないから、うるさいまわりがなくて気楽だと思いかもしれないけれど、合わなくなったときに、抑えてくれる人がいないのはかえって困りものかもしれない。たちまち棄てられて終わりってことだってあるだろう。気がかりがこれだけたくさんあるのに、無理にいい返事をする必要はないと思いますよ」。

壁越しに聞く陳淑文は歯噛みをします。

崔「これからは以前とは全く違うあたしとして生きてみようと思うのです。前の旦那はおっしゃる通りああいとお方でしたけれど、遊びなどまるでご存知でないごくごく地味なお方こそがいまのあたしの望みです。お役人さんとして出世は大切でしょうけれど、そのお方に合った生き方をされるのが何よりだと思います。勉強のことしかご存知ないのなら、あたしだって、一通りの勉強はしました。『論語』でも『礼記』でも結構です、夫婦して難しい本を手にしながら暮らしましょう。世間知らずとおっしゃるのなら、あたしの方

はこれまでいくらか苦勞もしましたから、そこは補つてさしあげられるのではないのでしょうか。

劉「立派な心がけだこと。だけど、あんたもこのまま都にいれば、何不自由なく暮らしていけるのだらう。何も堅苦しいお役人様の奥様にならなくてもいいのではないかい。こうして話をもつてきたあたしがいうのも麥だけれど。崔「お話を伺つていますと、そのようなお方と夫婦の縁を結ぶことができたならば、いまからでもあたしだって、きちんとしたお役人様の奥様になれそうな気がしてきました。そのようなお方の手助けをしてさしあげるのが、きつとあたしのこれからの役目なのです。お堅いお方であるのに、あたしが娼妓だったことをご承知の上で嫁にしてくださいるので、ありがたいではありませんか。ご親戚がいらつしやらないとのことですから、そのお方さえないとおっしゃってくださいれば、誰にもあたしの過去を詮索される氣遣いがありません。これよりいい話はないように思います」。

劉「氣に入ってくれたのは何よりだけど、実は、先さまはたいそう急いでお



いんです。明日か明後日にでも都を発ちたいのだそうだ。もっと早くにこの話を耳にしていれば、こんなあわただしいことにはならなかったのだけれど。でも思えば、あと一日か二日遅れたら、あちらの方はいつてしまったわけだから、こうしてうまい具合に間に合いそうだというのも、縁というものであるのかもしれないね」。

崔「そのようにあたしも思ったところですよ。きつと特別なご縁なのです。どうかまとまるように進めてはいただけませんでしょうか」。

劉婆さんは、二人をいっどこで引き合わせて祝言の真似事をし、そのまま舟で出発という段取りまでうまい具合にまとめあげてしまいます。もちろん、金のこともきつちりと話を付けます。

崔蘭英が帰りますと、壁の内側から出た陳淑文は上気して魂の抜けたような顔。

劉「このようなことでよろしかったのでしょうか。もし、あの女ではお気に召さないのならば断ってさしあげます。話を壊すのは造作ありません。で

も、あたしから見ても、あれだけの女はなかなかないと思いますよ。器量はかりでなく、お役人様の奥方として、立派になられましょう」。

陳「気に召すも何も、これ以上の話は、地の果てまで探してもないと思います。有難い限りです」。

床につくくらいに頭を下げて礼を言います。

王「しかし、婆さんが言っていた通り、気が合うのかどうか、そこは少々というか、かなり心配ですが。勉強一筋のあなたさまと、蘭英さんとは、これまで生きてこられたところが離れ過ぎていますからな」。

陳「心掛けのいい女性だとわたくしは思いました。運悪く娼妓になってしまった気のある女性なのです。以前とは違う生き方をしたとおっしゃっていただけではありませんか。これまではあの人とわたくしは違っていても、これからはこれからです。二人で新しい生き方をするのです」。

王先生は、陳淑文が妻の存在を忘れて、すっかりその気になっているのを見て、

王「蘭英さんは大変な美人で、それがしだつてうっかりすると惚れてしまいそうでした。娼妓だったころには、普通の男が適わない立派な詩をつくるという評判も聞きました。心掛け一つで、お役人の立派な奥様になることでしょうか。ただ、それでも一つだけ気になることがあります」。

陳「何でしょうか。おっしゃってください。あの人に何か変なところでもあったのですか」。

陳淑文が気色ばんで言うので、王先生と劉婆さんは顔を見合ませます。

王「気になるといっても、壁越しにちらつと見ただけの印象ですから、あてにはなりません。あえていえばですけど、美しさの蔭に、ちよつと陰があるような気がしまして。おとなしいあなたさまとは合わないのではないかと」。

劉「あたしもこの際だから、あけすけに言っておくと、強い女の尻に敷かれてしまうのがお嫌なら、ちよつと考えものかもしれません」。

陳「お二人には、わたくしが余程頼りなく見えているのでしょうか。わたくしだつておとなしいばかりではありません。これからお役人になるのです」。

強面でびしつとやらなければならぬことだつてあるでしょう。わたくしはこれからはこれまでのわたくしではなくなるのです。あの方がおっしゃったのを聞いていなかったのですか。きちんとしたお役人様の奥様になりたいと。これから、あの方と二人で、二人ともが新しい人生を始めるのです」。

陳淑文はまた同じことを言います。

王「ふむ、まことに結構ですな。それなら、婆さんの段取り通りでいくとしましょうか」。

三人で祝杯を挙げます。

すつかり崔蘭英に心を奪われてしまった陳淑文が、この後どのようにしてお内儀に話をするのか、王先生には想像がつきません。案外と冷たくあつさり棄ててしまうのかもしれない。気が弱く不器用な人はかえつてそのようなことをしてしまうものです。それではいかにもお内儀が気の毒ですが、この話がなければ夫婦で死んでいたのでしょうか、悪いばかりともいえないでしょう。とりあえずは、陳淑文が喜んでゐるのを是としようと思うのでご

ございます。

**月**日の経つのは早いもので、数年後の一月十六日の昼過ぎ。

前の晩は元宵節（げんしょうせつ）で、都はどこも夜通し賑やかに人通りが絶えなかったのですが、王先生は宵のうちに表通りに出て、街に燈籠が灯されるのを眺めただけで満足し、早々に寝てしまいました。

一月十五日の元宵節の前後五日間は、都はどこも無数の燈籠で飾られ、見物客が地方からも大勢押し寄せます。

三遊亭円朝作の『牡丹燈籠』という怪談があります。焦れ死にをしたお露の幽霊が、牡丹を描いた燈籠を提げた下女とともに、からころと下駄を鳴らしつつ、萩原新三郎のもとに毎夜通ってくるという話でございます。その季節は、死者がこの世に帰ってくるにふさわしいお盆となっています。

『牡丹燈籠』の原話は、中国の明の時代に作られた『牡丹灯記』で、もと

は元宵節の夜に男女の最初の出会いがありました。喬生（きょうせい）という男が、妻を喪つて日も浅いことから、燈籠見物に出歩く気もおこらずに、家の門にたたずんでいますと、符麗卿（ふれいけい）という美女が通りかかり、互いに気が合つて、その日から符麗卿は毎夜通つてくるようになります。

鬼といいますが、日本では節分におなじみ青鬼や赤鬼を思い浮かべますが、中国の鬼はまったく別物で、死んだ者が生きていたときと同じ姿で現れるもの、つまりはゾンビです。『牡丹灯記』の符麗卿は鬼でありまして、それを換骨奪胎した『牡丹燈籠』のお露は、日本の幽霊としては珍しく足があり、下駄をからころと鳴らして通つてきました。

『牡丹灯記』は元（げん）の時代の末の明州を舞台としていました。元宵節が最も盛んであったのは宋の時代で、とりわけ都の華やかさは格別でございました。皇居の正門である宣徳楼の真向かいには、冬至の日から組み始められる山棚という木の舞台が作られ、そこで実に様々な出し物が披露され、見物人の多いことといったらありませんでした。一月十四日には、その宣徳楼

から皇帝がお出ましになり、都の南端近くの五嶽観まで、目抜き通りの御街を華やかに練り歩きました。見物人の多いことといったらありませんでした。相国寺では広い境内を無数の出店が埋めつくし、いまでいえばさしずめ大型ショッピングモールのクリスマススイブさながらに、押すな押すなの人出で、これまた見物人の多いことといったらありませんでした。開封の元宵節は間違いない当時の世界で最大のイベントであったのでしよう。

王先生は、一月十五日をはさんだ三日間は子どもたちの勉強はお休みにして、十六日は朝から一人静かに書見をして過ごし、昼過ぎであります、戸口に足音がぱたぱたと近づき、影がさしましたので、誰かがきたと知れます。戸を叩くなり声をかけるなりするだろうと待っていますと、しんと静まったまま何事ありません。立ち去ったのかと気配を伺うと、どうやらまだいるらしい。

いぶかしさに、

王「どなたですか。ご用があるのなら、開けてください。」

一向に返事がなく、

王「やれやれ」。

書物を置き、立って扉を細く開けますと、外によい身なりの一人の男。その虚ろな顔を見て、扉を開け放ち、

王「これは驚きました。あなたさまでしたか。いつ都に帰られたのです」。

陳淑文です。

先生の声に、陳淑文は急に驚きの表情を浮かべ、おどおどと左右を見て、あわてて向きを変え、立ち去ろうとします。

王「どうなさいました。いらしたと思つたら、いつてしまわれるのですか」。

急いで手首を掴みます。それほど力を入れたわけでもないのに、陳淑文はよろめいて倒れそうになります。

王「おやおや」。

抱えるようにして起こしますと、陳淑文は低くうめきます。

王「どうなさったのです。ご病気ですか。見れば、顔色がお悪いようだが」。



陳「いえ」。

顔をそむけて先生の腕から逃れようとするので、

王「とにかく、こちらへ」。

引つ張つて扉の内に入れます。陳淑文はからだに力が入らないのか、ゆらゆらとなされるがままです。

王「都にはいっお帰りですか。どうなさったのですか。何かあったのですか。よもやとは思いますが、何かまずいことがあつて逃げてきたというのではありませんまい」。

陳「いえ、とんでもありません。きちんと任期を終えて帰つてまいりました。それはそれでよかったです」。

王「では、都に戻つてから、何かあったのですか」。

先生は都に残していった陳淑文の妻のことを思います。

陳淑文は手で顔を覆つてまた低くうめき、体をぶるつと震わせます。

王「何か余程のことでも」。

泣くような声で、

陳「先生には本当に申し訳ないです。帰京のご挨拶にとくに伺わなければいけなかったのに、こんなことになってから急にきて。でも、頼れるのは、先生しかいらつしやらないのです。それでも、こればかりは先生にも申し上げられないと、黙って帰ろうとも思いました。困ったときにばかり伺って申し訳ありません。お詫びします。でも、先生だけなのです。さんざん迷いに迷いました。でも、わたくし一人ではどうすることもできません。ほとほと困ってしまいました」。

陳淑文はどうとう泣き出します。

前にも同じようなことがあったと、先生はやや渋い顔ながらも、

王「とにかく、何があったのかお聞かせくださいな。その上で、力になれることがあれば」。

つい長年のよしみで、そのように言ってしまうのであります。それに、崔蘭英を世話したその後の顛末も気にかかります。

陳淑文は顔を上げ、

陳「鬼というものは本当にいるのでしょうか」。

王「唐突に何をおっしゃいます。何か怖いものでもご覧になったのですか」。

陳淑文は身を竦め、

陳「見なかった、あれはなかったと思います。でも、見てしまったのです。話もしたのです。恐ろしいことに」。

王「何のことはわかりませんが、見て話もしたのなら、鬼ではないのではありませんか」。

陳「だって、あの夜に、わたくしは確かに」。

陳淑文は恐ろしい形相に変わり、

陳「どうしてあんなことを。でも、ああするしかなかったのです。それでやってしまったのです。確かにわたくしはしたのです。ですから、あれは鬼なのです」。

王「おっしゃることがさっぱりわかりません。どうか、筋道立ててお話いた

だけないでしょうか」。

陳「どうか助けてください。先生しかいないのです」。

気がふれたように先生にすがります。

どうやらこれは鬼というものを実際に逢ったらしく思えてきます。鬼なら、

怪しげな護符を売る劉婆さんの領分かもしれませぬ。

王「まあまあ落ち着かれて」。

と、例によって茶をいれて先生が聞き出しましたのは次のようなことでありました。

**陳** 淑文は三年の任期を大過なく勤め上げ、都への帰還の旅。汴河（べんが）を舟で遡って明日は都に入るといふ晩でございました。

大小さまざまな船が川面に溢れ、船着き場には、お役人相手の高級な店から、船子相手のごく安直な店まで、軒を連ねてまことに賑やかでございます。

手ごろな場所に舟を繋ぎ止めますと、酒と食べ物を買ってこさせ、

陳「おまえたちとも明日になれば別れた。せいぜい今夜はそこらで思いっきり遊んでくるがいい」。

船頭たちは銭を受け取って大喜びでいってしまいます。残ったのは崔蘭英と一人の侍女。侍女は崔蘭英が妓女であったころから仕える少女です。

灯をともし、酒食を並べ、杯を重ねます。

陳「明日はいよいよ都か。そなたと都を発つたのが、随分と昔に思える」。

崔「あれからいろいろなことがございましたもの。おまえさまはたいそうご立派になられ、お発ちになったところとは見違えるようです。都の道で、ばったり昔の知り合いと出合っても、きつと気付かれませんかでしょう。あのころはこうではありませんでしたもの」。

崔蘭英はしげしげと陳淑文を見て微笑みます。

陳「昔を思うと恥ずかしい。襪履同然のものを、よくまあ平気で身に付けて往来を歩けたものだ。こうしてまともなものを着て、お上の御用をすませて帰

つてこられたのも、すべてはそなたのお蔭だ。そなたがいなければ、三年前に都を発つことすらままならなかつた。そなたも、お上に仕える者の妻であるのがすっかり板についた。大した変りようだ。そなたこそ都に帰つても、昔の崔蘭英だとは、まさか誰にもわかるまい」。

崔「それがあたしの願いでしたから、本当にそうだといひのですが。でも、あたしはまだまだ昔の癖が抜けられないようです。おまえさまが、あのころとは違つて垢抜けされたご様子になられたのは、よかつたのやら。悪くしてしまつたような気がしなくてもありません。昔はそれはそれはとてもお堅いお方でしたから」。

崔蘭英がしなだれかかりますと、

陳「あのころは科挙の勉強しか知らないまことにつまらぬ男であつた。朝から晩まで経典を覚えるだけで、あのまま一生を終えていたかもしれないと思うとぞつとする。どうだい、あの月にふさわしい曲を歌つてみようか」。

中天に輝く月を指さします。

崔蘭英は琵琶の弦を調整し、

崔「何にいたしますか」。

陳「短く『菩薩蛮』(ぼさつばん)ではどうかい」。

崔「かしこまりました」。

『菩薩蛮』は唐代から流行る曲です。それに合わせて陳淑文が歌いましたのは、

来時楊柳東橋路

東の橋の柳の下へとやってきたのは

曲中暗有相期処

君が歌でそつと告げた逢引の場所

明月好因縁

明るい月が縁結び

欲円還未円

まん丸になろうとしてまん丸でないこのときに

崔「この夜この場所に、ほんと、ぴったりの詞をお選びになりましたこと。月ほまさしく満月の前。都の東の橋まであとわずかです。これは晏幾道(あんきどう)様がお作りになった詞でありましょう。存じておりますとも。続きはこのあたしが」。

さすがに陳淑文よりはるかに巧みに崔蘭英が歌うのを聞きながら、つらつら思いますのは、明日からのこと。帰京の旅に上ってからそれを思わぬ日はありませんでしたが、残すは今晚だけです。

都には妻がいます。ひたすら科挙の勉強に明け暮れ、襪履を纏って何とも思わずにいたのは遠い昔のこと。崔蘭英との三年間に比べて何とも味気ない歳月でした。

妻には崔蘭英にもらった銭の一部を渡し、

陳「王先生の口利きで、ある商人がちょうど同じ方向に行く船に乗せてもらえることになった。ただ、乗れるのは一人だけだというのだ。どうにかこれだけ工面してきた。すまないが、おまえは都に残って、これでしばらく食いつないでいてくれないか。向こうでお手当てを頂戴したら必ずすぐに送る。どうか辛抱してくれ」。

崔蘭英のことはもちろん内緒で、妻と手と手を取り合い涙を流して別れました。



崔蘭英と一緒になってみると、どうして出会うのがこうも遅かったのかと嘆くほどに仲睦まじく、三年間というものは、ただただ楽しいことばかり。崔蘭英はあらゆる面で夫を喜ばせてくれました。

現代の日本では官吏とひとくくりにはいますが、昔の中国では官人と吏人は明確に分けられておりました。官人は科挙の合格者で、地方官からスタートし、実績次第で都の高官に昇り、あわよくば宰相にもなる可能性があります。吏人はその土地で採用され、官人の下で働き、基本的に一生その土地から離れることはありません。科挙に合格して初めて地方官になった者は、難しい学問は知っていても、必ずしも法規に精通しているわけがなく、土地の実情などは一向に知りませんから、吏人の助けがなくては仕事になりません。官人はお上から俸禄を頂戴しますが、吏人には決まった給与がなく、口利き料や手数料で暮らしを成り立たせています。勢い吏人は、法を守るよりも、身入りが多くなるような仕事をするので、ときに不正を為します。それを厳しく取り締まるのが官人の大事な役目なのであります。大方の官人には不

正を見抜く眼力がなく、むしろ、魚心あれば水心で、吏人は官人に鼻薬を嗅がせて共存共栄を図り、官人は吏人に適当に操られてしまうのが普通でした。

崔蘭英はそうしたからくりをよく心得ていて、吏人を存分に使いこなす術を夫に授け、吏人の上前をはねて、お上から頂戴する俸禄の何倍もの収入を得ました。わずかな金を借りるのもままならなかった都での暮らしが嘘のようで、陳淑文は自分もひとかどの人間になったものだと思つたのであります。

かくして昼も夜も崔蘭英なしでは過ごせぬ身となつたのでありますが、都に帰れば妻がいます。妻は崔蘭英がいることを知らず、崔蘭英は妻があることを知りません。もしも二人が互いに知れば必ず騒動となるでしょう。正妻がいて妾がいるのはごく普通のことではあつても、崔蘭英の性格からして、丸くおさまるとは思えません。訴訟沙汰にでもなれば、お咎めを受け、官界から追放されてしまう恐れさえあります。

あれこれ思っていますと、崔蘭英の弾く琵琶の音と、崔蘭英の歌う声が夢か幻のように聞こえます。このような美しい女の美しい声を間近に聞くのは、

もともとの自分にはありえなかつたことで、これは夢であるに違いありません。

崔蘭英に注がれて酒をあおりますと、いよいよ夢のようです。

崔「この晏幾道様の詞を、おまえさまはいつ覚えたのです。お歌いになるのが随分とお上手になりましたこと」。

陳「そなたに教わる以外にないだろう。昔は、晏幾道様の詞など、聞くのもけがらわしいくらいに思っていた。宰相までなされた晏殊（あん しゅ）様がお父上でありながら、長らく官途に就かず、遊蕩三昧であつたからな。そなたのお蔭で、いまでは詞の心がよくわかるようになった」。

陳淑文はそう言いつつも、晏幾道も最後は正道に立ち返つて立派な仕事をしたことを思います。

崔「そのようにおっしゃるのを聞きますと、おまえさまも随分とやわらかく洒脱になりました。これで都に帰れば、あたしなんかよりもずっと若くて奇麗な妓女が大勢いますから、お心を動かしたりするのではないかと、気が

がりでなりません。変な気を起こしたら承知しませんから」。

崔蘭英につねられて、

陳「そのようなことがあるはずがない。わたくしにとって大切な女はそなた一人きりだ」。

陳淑文はあえて声を強めて抱き寄せます。侍女が気をきかせて灯を吹き消します。

今夜限りの歡を尽し、しばしまどろんで目覚めますと、月は西空に沈もうとしています。崔蘭英は船べりによりかかって眠っています。侍女は少し離れたところで小さな寢息を立てています。周囲の船はどれも寝静まつたらしく、遠くに二三の明かりが揺れ、船着き場から、なお遊び続ける声がときおりわつと上がります。

あたりの静けさに、これまで耳に馴れてしまっていた水音が低く聞こえてきます。都近くの流れはことに速く、岸に繋がれた船の間をどうどうと恐ろしいような音を立てています。

陳「夢であつたのか」。

三年間のすべてが夢であつたと思つと、都に残した妻が哀れにも愛おしくなります。勉強しかできない自分を、懸命に支えてくれた妻です。崔蘭英に比べれば、美しくもなく、才覚もなく、特に何かの取り柄があるわけでもありません。それでも、健気に支えてくれました。いつか必ず科挙に合格して、妻の苦勞に報いたいと思つていました。合格したならば儒教の教えの通りの清廉な官人にならうと思つていました。その思いとはまるで異なるこの三年間でした。

崔蘭英が眠る近くには竹で編んだ篋はこがあります。常に身近に置いて、陳淑文には決して触れさせません。中身は財宝であるらしく、この三年間に随分と重みを増したようです。

すべては夢であり、しかもよい夢ではなかつたようです。夢からはいつかは目覚めなければなりません。明日は都です。明日からは、正しい官人として妻とともにやり直そうと、陳淑文は心を定めます。

残っていた酒をあおると、じりじりと崔蘭英に近寄り、じつと寝息を探ります。

陳「夢だ。そなたはもとよりいなかったのだ」。

びくんと身を震わせます。昔の自分ならこのようなことは決してできません。自分は変わったのです。自分を変えたのはこの女です。だから、全てが夢なのです。

渾身の力で崔蘭英を抱え、水に落ちます。深い眠りにあつた崔蘭英は悲鳴も上げずに流れに呑まれ、ただ滔々と川音が響くばかり。わずかに残る月の光に川面をじつと遠くまで見定めてから、

陳「大変だ、妻が水に落ちた」。

侍女が飛び起き、船べりから水をのぞきます。

陳「そこからだ、そこから、酔つて落ちたのだ」。

侍女を後ろから抱えて落とします。侍女の悲鳴は一瞬にして消えます。

崔蘭英の篋に手をかけ、これも夢にしてしまおうと思つて、急に惜しくな

り、

陳「妻が水に落ちた。侍女も一緒に落ちた。だれか助けてくれ」。

叫び声に、周囲の船が起き出し、明かりをつけて水面を照らします。水は勢いよく流れ、二人の姿はどこにもありません。

夜明けとともに、船頭に命じて船を下流へと戻し、両岸をさぐり、船着き場ごとに尋ねます。

「この流れにはまったら滅多なことでは助かりません。よほど運がよくて、死骸がどこかにひっかかるだけです」。

二日ばかりそこらを上下し、

「とんだご不幸でございますが、おあきらめいただくしかないようです」。

船頭に言われて都に入りました。

船から陸に上がりますと、崔蘭英の持ち物はすっかり処分し、ただ篋だけは開けもしないで残し、以前の家を訪ねますと、妻は昔のままの姿。

三年の夢はそこで終わり、

陳「よくぞ辛抱してくれた。これからは普通と一緒に暮らして決して離れることはない」。

と、涙ながらに誓ったのでございます。

崔蘭英とともに都を発つたのを知っているのは王先生と劉婆さんだけでしたから、陳淑文は二人のところには顔を出さずに、次の任地が決まったらそのまま行つてしまおうと考えていました。

この時代の官人は結構だぶついています、任期を終えたらすぐに次があるというものでもなく、うまいコネを持たぬ者はしばしの浪人暮らしを余儀なくされることも少なくありませんでした。それでも、崔蘭英の篋があれば心配はあるまいと、陳淑文は妻とともにのんびりと日を送り、年も改まつて元宵節となりました。

妻と手を携えて燈籠見物に出て、賑やかさに誘われるままに相国寺の夜市を見てまわります。

妻「わたくしも都に長くなりましたが、こうして元宵節に相国寺にきました



のは初めてです。聞いてはいましたけれど、こんなにもたくさんのお店が出ているのでございますね」。

陳「合格するまでは、貧乏で元宵節どころではなかったからな」。

妻「合格なさってから、三年の間というものは、一人ぼっちで都に残り、元宵節が巡ってききますと、外の賑わいに寂しさが募るばかりで、いつも泣いていました。今宵こうしていられるのが、まるで夢のようです」。

陳淑文は、妻がたまらなく愛おしくなりまして、腕を引き寄せてぐいと抱きます。

妻が都で一人で泣いていたという元宵節に、陳淑文はといえば、田舎町ですから都とは比べようがありませんが、燈籠見物に崔蘭英と出歩いていたのであります。あの当時の甘美な思い出が甦るのを打ち消し、あれは夢だったのだと改めて思います。

「おや、およろしいことでございますこと」。

耳元でした声に、ぞっと寒気が走ります。それは夢でなければならぬ声。

妻をいつそう強く抱いて胸の内におさめ、声が出た方を見ますと、すぐそこに崔蘭英の顔。侍女もいます。

陳淑文は驚きの声を漏らしそうになるのを懸命にこらえます。

崔蘭英は艶然と微笑み、

崔「積り積もった話がございますのよ。でも、ここではお困りでしょう。あちらの砌にお越しくださいませんこと。必ずくるのですよ。」

その声の余韻が陳淑文の身に冷たく染み入ります。

崔蘭英と侍女は、雑踏などまるで存在しないかのように、真直ぐに、寺の回廊の蔭へと歩み去ります。

陳淑文は妻を夜店の明かりの下に立たせ、

陳「いいかい、少しの間だけ、ここにいてくれないかい。ちよつと用をすませてくる。決してここを動いてはいけない。」

店の主人にも頼んで、崔蘭英の待つ場所へといきます。

陳「そなた、無事だったのか。そうか、そうか、それはよかった。」

無理に朗らかな声をつくります。

崔「どうやら、あたしたちがいてはお困りなのでございましょう」。

陳「一生懸命に探したのだ。方々手を尽くしたのだけれど、どうしても見つけれなくて、皆に言われて、仕方なくあきらめたのだ。それにしても、どうやって助かったのかい」。

崔「これと二人、水中で出会いまして、抱き合っただけでそのまま浮きつ沈みつ流れて、初めて手に触れたものを握りしめたのが幸いと木の根で、それにすがってどうにか陸に上がることができました」。

陳「それはどこだったのだい。二日間、あのあたりを上下して、どうしても見当たらなかったのだ」。

崔「聞くところでは、揚州の近くとか」。

陳「そんなにも遠くに流されてしまったのかい。それでよく無事だったものだ」。

崔「でも、もう、よしませう、昔のことを言うのは。あたしも一時は都に

名を成した妓女でございます。酸いも甘いも十分に心得ています。おまえさまには、人波の中でも抱き合おうようなよいお方がおられるのでしよう。何も申しません。いまさら恨みを列ねてはあたしが惨めになるだけです。ただ、あたしもこの子も、身一つで川に流され、都にくるまでには言うに言えない苦勞がございました。これからのこともあります。あたしのあの篋を返してくださいませんこと。それさえいただけましたら、あなたさまとあたしの縁は一切なかったことにいたしましょう。

崔蘭英がさばさばと優しげにいうので、陳淑文はふと変な氣をおこし、陳「篋とは何のことかい」。

と、誤魔化そうとします。もしも次の職がなかなか回ってこなかったときに頼りになるのはあの篋です。

崔蘭英は一瞬にして恐ろしい形相に転じ、

崔「知らぬとは言わせません。青い布できつちり包み、お部屋の奥に、書物の下に隠しておられるあの篋です。あれを、明日とは言いません、いいです

か、明後日の未の刻までにお持ちください。必ず、ご自身で。魚巷城の易者の武三の裏店です。刻限までにいらつしやらなければ、すぐにお上に訴え出ます。おまえさまは獄に繋がれます。それくらいはあたしには何でもないので、おまえさまはよくご存知でございましょう。おまえさまは何もかも失つて塩漬けになります。あたしから申し上げるのはそれだけです。さあ、さつさとあちらにいつて、あの女に『わたくしにとって大切な女はそなた一人きりだ』と、おっしゃいなさいな」。

陳淑文は崔蘭英に背中を強く押され、それからはずべてが上の空。困り果てて王先生のもとにやってきたのでございます。

陳「あれは本当に助かったのでしょうか。それとも鬼なのでしょうか」。

憔悴し切った陳叔文に、どうしてこの男が大胆にも二人の女を川に突き落とせたのか不思議です。それができたのなら、鬼がこようと怖がらず立ち

向かえるであろうにと、思います。

王「相国寺ではつきりと話をしたのなら、鬼ではなく、根につかまって助かったと言ったとおりだったのではありませんか」。

陳「近くの岸をくまなく探しました。あの急流では助からないと、誰もがいきました。夜のうちに、揚州の近くまで流されるなんてあるはずがありません」。

王「昔から、元宵節には不可解なことがおこると聞きます。昨夜はたまたま何か妙なことになったのではありませんか」。

陳「元宵節を過ぎたら大丈夫なのでしょうか」。

王「それがしは、怪力乱神を語らずとおっしゃった孔子様の弟子です。鬼のことを問われても答えようがありません」。

少し突き放して陳叔文の様子を見ます。

陳「わたくしはどうしたらいいのでしょうか。都から逃げたら助かるのでしょうか」。

王「相手が鬼ならどこまでも追いかけてくるでしょう。鬼でなければお上に訴え出て、あなたさまがしたことが知れてしまいましたしょう」。

陳「どつちにしても駄目なんでしょうか」。

おろおろする陳叔文に、他に助けになる者もないのだから仕方あるまいかと思いつつ、

王「鬼のこととなると、それがしよりも、劉婆さんの出番でしょうな。蘭英さんの話だって、そもそもはあの婆さんが始まりだったのですから、あの婆さんに訊いてみましようか」。

この際、劉婆さんに押し付けしまおうかとも思い、本当に鬼なら、この先どういふことになるのか、見たい気もします。

陳「**ど**うなのでしょう。わたくしは鬼にとりつかれてしまったのでしょうか」。

おどおどと劉婆さんの前に顔を差し出します。じっと見据えられ、陳叔文

は耐えかねてうつむいてしまいます。

劉「怖がつてはいけません。あなたさまの一大事です」。

王「あなたにどれだけ見立てがつくのかい。人相なら、それこそ武三にみてもらったらいいのではないかい。なかなか評判がいいらしい」。

劉「あたしだって、明らかな死相が出ていけばそれとわかります。そのときは、こちらをお助けする手立てを真剣に考えなければなりません。でも、こうして見ましたところでは、死相というものはまだ出てはいません。ひとまずご安心ください。鬼にとりつかれても、昨日の今日では、すぐにははつきりとは出ない場合もあります。危難が迫っていると用心するに越したことはありません」。

陳「つまりそれはどういうことなのでしょうか。どのようにしたらよろしいのでしょうか。あれには近づかないのがいいのでしょうか」。

劉婆さんはどこやらを探るような仕草で思索し、

劉「明らかな死相が出ていれば、とにかく遠く避けるしかありません。それ



でも難しいかもしれません。お上に訴えられては、命は助かりまして、獄に繋がれてもうお役人様ではいられなくなつてしまいます。もしも相手が鬼でなければ、篋を渡せば満足してくれましょう。この場合は、どうやら、明日の未の刻と言われたのを破るのはいかにも具合が悪かろうと存じます」。

陳「では、魚巷城にはいかなければならないのでしょうか」。

劉「もしも相手が鬼なら、先方の気持ちをなだめるのに、羊の肉と酒の用意は欠かせません。刻限には決して遅れませんように」。

陳「わたくし一人でいくのでしょうか」。

「すぐるように見られて、王先生は目を逸らせます。

劉「誰かが一緒では、かえつてまずことになるやもしれません」。

陳「でも、一人でいけるでしょうか」。

陳淑文がいまにも泣きそうなので、

王「明日の未の刻に合わせて、それがしがたまたまその裏店のあたりを通りかかるというのはどうでしょうか」。

これまでも何度か助けた間柄であり、また、鬼の顛末がいかになるのか知りたくもあって、そのようにいいますと、

陳「ぜひそうしてください」。

と、王先生にとびつきます。

王「明日は子どもたちがくる日なので、少しばかり早めに帰らせましょう」。

劉「先生がいらっしやるのなら、あたしも偶然に通りにかかりましょうか」。

陳「本当ですか。心強いです」。

劉「それと、この護符をぜひ身に付けてください。これを離さなければ、たとえ何かあっても、命ばかりは助かるでしょう」。

いつも配り歩いている黄色い護符を差し出しますと、陳叔文はうやうやしく頂いて懐におさめます。

王「嫌なことを言うようですが、篋の中身には手を付けていませんでしょうな。相手が鬼であれ人であれ、そっくり返さないと、怒りを招くだけです」。

陳「あの中にあるのは、あれがもとから蓄えていたもの以外にも、わたくし

があちらにいつてからこしらえたものもたくさんあるはずですよ。すべてがあれのものというのではないのです」。

王「惜しむのですか」。

陳「いえ、そうではなくて、わたくしも困るものですから」。

劉「陳さん、どうかしてはいませんか。決してここで欲を出してはなりません」。

厳しく釘を刺します。

王先生も、陳叔文は以前とはどこか変わってしまったように感じます。

**次**の日は、子どもたちが三日ぶりにきて、元宵節の夜店で買ったものを自慢し合ったり、あるいは先生のためにと親が買ったものを届けにきたりなどして、いつもより早く終わらせるつもりがかえって遅くなり、劉婆さんと連れ立って魚巷城に到着したのは、すでに未の刻をいくらか過ぎたところ。

まことにうらかなお日和。さんさんと春の光がそそぐこの町で、怪異なことがおころうとは思えません。

王「お一人でいけたらうか。気の弱いあの方のこと、いや、昨日の様子では篋に執着があつて、結局家から出ずに、ぐずぐずしていても限らない。

我々がここまできたのが、まったくの徒労になつてしまわないとも限らない。何事も無いのならば、それでも構わないのだが」。

劉「あの護符さえ身に付けていれば大丈夫ですとも」。

王「護符は、鬼が相手なら効き目があるものかもしれないが、気の強いあの蘭英さんには太刀打ちできないだろう」。

劉「そりゃあ、蘭英さんでなくても、生きた人間には効きません。それにしても、あのお方も、よくまあ大胆なことをなされたものです」。

王「よほどせつぱつまつていたのか、陳さんも変わったのだろう。汴河の急な流れに落ちて、滅多なことでは助からないのだが、都で評判になる妓女は、あらゆる技芸に優れるというから、ひよつとして水練にも長けていたのだろ

うか」。

劉「やはり鬼なのでしょう。だったら、護符があれば心配ありません。裏店というのには、あそこを入ったところでございましょう」。

王「見たところ陳さんの姿はなさそうだ。刻限通りにお一人で入っていかれたのだろうか」。

劉「男女の仲というのにはわかりませんが、案外とよりがもどつて、お二人でしつぽりといひ具合になっているかもしれない」。

王「それこそ、鬼に命を吸い取られてしまうよくある話ではないか」。

大柄の男が地面にぺったり座し、路地の口が塞がれています。長々と足を伸ばし、天秤棒を支えに舟を漕ぎ、通ることができません。

肩のあたりを揺ると、目をこすりながら大あくびをし、

「おっと、いつの間に寝込んでしまった。おお、寒い。日が当たつてほかほかと暖かかったのが、すっかりかげってしまった」。

棒を掴んでやおら立ち上がり、

「おっと、これは、旦那ではありませんでした。ここで待つようにいわれたのだが、どうしたのだろう。てつきりお戻りになったのかと思いました」。

王「その旦那というのは、年のころなら三十五、六のお役人様かい」。

「へえ、たぶんお役人様なのでございましょう。初めて頼まれました、どのどなたさまかも存じ上げないのですが」。

王「頼まれて荷を担いできたのかい」。

「二つのうち一つが見かけと違ってなかなか重い荷でした」。

棒担ぎは肩をさすります。

王「その人はここを入っていったのかい」。

棒「へい。通りのそこまできまして、どなたかと会っておつもりだったのでしようか、しばらく立っておられました。時刻を随分と気にされて、そわそわ落ち着かないご様子でしたが、そのうちに、不意に入っていられました。あの門です」。

王「一番奥のあそこかい。あれは誰の住いなのかい」。

棒「あつしはここは初めてで、どなたのお宅なのでしようかなあ。門の前にいつの間にか若い女が立っていて、すぐにお役人様の手を取って中へひっばっていきました」。

王「担いできた荷物はどうしたのかい」。

棒「門の外に立っていますと、若い女がまた出てきて、『それをおくれ』と言うので、二つの荷を下ろしますと、軽い方の荷は無造作に門の中へ投げるように入れて、重い方の荷を両手で抱えて揺すり、『これで間違いないでしょうね』と、きつい口調で言いました。重いはずなのに、あまり軽々と持つので驚きました。『いまの旦那様に言われて運んできただけです』と答えますと、『しかとそうならいいが、違っていたら承知しない。いいかい、そこで待っていないさい。逃げてはいけない』と、さらにきつく言うので、『あつしは正直者で通っています。旦那様をここに連れてきてもらえばはつきりします。とやかく疑わないでくれ』と言ってやると、女は『余計なことを言わず、黙ってそこで待っていないさい』と、ふりふりしながら門から入っていきました。

あつしは、何だかおもしろくなく、旦那が出てきたら文句を言ってやろうと待っていたのですが、一向に出てくる様子がなくて、だんだんとあたりが妙に陰気になってきましたから、帰ってしまおうかとも思いました。ただ、逃げたと思われても嫌なので、日当たりのいいここに戻って、しゃがんで待つているうちに眠ってしまったのです」。

王「それで、その人はまだ出てきていないのだな」。

棒「あつしは眠ってしまったのですが、誰かがあつしをまたいで出ていこうとすれば、気付かないということはないでしょう」。

劉「揺するまでぐっすり眠っていましたよ。とにかく、陳さんはあの門から入ったというのですから、ちよつと様子を見にいきましょうか」。

三人で路地の一番奥にまでいくと、遠くで見た以上に、門はかなりひどく傷んでいます。塗りはほとんどがはげ、板ががさがさにささくれています。

棒担ぎは首をひねり、



棒「どうも妙です。さつき見たときには、随分と洒落たお住まいだと思ったのです。それで、お役人さまが、ねんごろな女の人を囲っていらつしやるに違いないとあつしは思いました。決してこんな壊れかけた門ではありませんでした」。

王「この門なのかい。見間違えたのではないのか」。

棒「ここです。はつきり見ました。おかしいこともあるものです」。

門は人の背よりも高く、中は見えません。気配を探ってみますと、物音一つなく、しーんと静まり返っています。

門をほとほと叩きますと、根元が腐っているらしく、ゆれゆら揺れ、いまにも倒れそうです。中からは何の返事もあります。

棒担ぎはさかんに首をひねり、

棒「実に妙です。あつしが見たときには、確かここに潜り戸があったのです。女がぱたんと閉めて入ったのです。様子がまるで違っています。ここにこんな大きな錠もなかったです」。

門に大きな錠がぶらさがっています。これでは中からは開けられません。

劉婆さんは数歩退き、つま先立ちでしきりに門のあたりを見上げ、

劉「これはよろしくありません。あの中には鬼気が充満しています」。

王「おどかしちゃいけない」。

劉「これでは、あたし一人ではとても手に負えません」。

劉婆さんは路地から小走りで出ていき、武三を連れてまいります。

武「実は、ここにはちよつと悪い噂がありまして、もう何年も空き家になっているのです。おかしな者に入られても困るので、こうして錠をかけてあります」。

錠を突っ込んでがちゃがちゃ動かすが、一向にあきません。

武「どうもおかしい。この錠で合っているはずですよ。いつこれをかけたのか覚えがないくらいずっとこのままですから、門から人が入るはずはないのだが」。

棒「あつしは確かに見たのです。若い女に手をとられて、お役人さまがはい

っていかれたのです。その後でまた女が出てきて」。

と、棒担ぎはくどくど繰り返します。

劉「これはどうやら鬼の仕業と決まりました。一大事です。こんなに恐ろしい鬼気を感じるのは初めてです」。

武「私も感じています」。

武三は鍵を動かす手を止め、じつとうつむいて何か様子を窺うので、

王「陳さん、陳さん。いたら返事してください」。

王先生は大声で叫びます。

中からは何の応答もありません。

劉「あの方に死相は出ていなかったはずです。護符もあることですから」。

劉婆さんは頼りなくつぶやきます。

武「事はどうやら差し迫っています。錠はあきらめ、いつそのこと」。

門に体当たりします。王先生も棒担ぎも一緒になって体をぶつけると、門がぼったり倒れます。その向こう側に現れ出たものと向き合って、三人は思

わず後ずさりします。

まだ昼間なのに、そこは闇に包まれています。背丈ほどに伸びた枯草があたりを覆いつくし、その奥に、伸び放題の蔦に埋まった真黒な廃屋があります。

王「本当にここに入ってしまったのかい」。

棒「へい。外からちらっと見ましたときには、いかにも手入れのいい小奇麗なお庭でして、花も咲いていたのですが」。

王先生は陳叔文をもう一度呼びます。やはり返事はありません。

王「これはどうしたものか」。

武「この先に入っていかれたのなら、すこぶる危ういです」。

王「とにかく中を見てみるしかないか」。

倒れた門を踏んで歩み出そうとするのを劉婆さんは止め、

劉「危険です。ほら」。

地面から抜け出た門柱の下に、割れた黄色い護符。それを拾い上げ、

劉「こうなつてしまつて、あの方をお守りすることもできません」。

王「陳さんがうつかり落ちていったのだらう。割れたのは、いま門が倒れたときではないのかい。たとえ鬼がしようと、恨まれる筋などないのだから、恐れるものではない」。

自分に言い聞かせて入つていこうとします。

武「お待ちください。中で何かおかしなことがあつてもいけません。踏み込む前に、念のためここに件作行者（きんさくこうしや）を連れてまいりましょう。それにあの不気味な暗さ。燭がなければとても入れませんでしょう」。

王先生も、もつともなことと、足を止めます。

件作行者とは死骸を検分する役人。もしも犯罪の疑いがあればお上が捜査をしますが、疑いがなければそのまま件作行者が埋葬の段取りを整えます。つまり件作行者は検屍役人兼送り人といったものでございます。

人が集まつたところで、草を踏み分け、蔦を切り払い、戸をこじ開けます。中はよいよよい真つ暗。

王「陳さん。陳さん。きておられるのですか」。

先生の声が陰々と響きます。

件作行者が燭を前に掲げますと、床には厚く埃が積もっています。

件「ご覧なさい、足跡一つ付いていません。ここからはもう何年も誰一人として入っていないのでしよう。この者が夢でも見たものではありませんか」。

棒「門から間違ひなく入っていかれました。その先のことは、あつしにはわかりません」。

劉「これは尋常ならざる鬼気です」。

武「まことによるしくありません。そろそろもう夕暮れです。中はこのように真つ暗です。どうでしょうか、その陳さんとおっしゃるお人の家についてみて、もしも今晚お帰りがないようでしたら、明日の朝に改めてここを調べてみるというのではいかがでしょうか」。

件「それがいいと思います。いたずらに騒ぎをおこさず、いったん引き揚げましょう」。

皆が怖気づくところを、王先生は件作行者から燭を取り、

王「それがしが見てまいります」。

ぐいと足を踏み入れます。

劉「王先生は昔から怖いもの知らずで、困ったものです。先生が入って行かれるのなら仕方ありません、この護符でお守りしつつあたしも付いていきますよう」。

劉婆さんは護符を頭上に掲げ、呪文を唱えながら先生に続きます。

武三も、

「それなら私も」。

と、やはり呪文を唱えつつ進みます。

件作行者も棒担ぎもこわごわ後に従います。

王先生は左右を照らしながら、ときどき陳叔文を呼んで、奥へと奥へ入っていきます。

幾部屋も通り過ぎてなお奥があり、これほど大きな家であるはずがない

といぶかしく、さすがの王先生の足も前に進み難くなります。立ち止まりか  
けますと、思わず、背中にどつと冷たいものが流れ下ります。

床の埃の上に、幾つもの足跡がくつきり付いています。誰かがここにいた  
のです。燭を上げて足元から先を照らして行くと、そこからずっと前に続く  
多数の跡があります。

王「これは」。

振り返ると、劉婆さんが震える声で、

劉「そつち」。

と、指さします。

見ると、戸が開いていて外が見えます。

王「ひよつとして元に戻ってきてしまったのかい。そんなはずはないのだが」。

王先生は胸を抑え、鼓動を整えますと、

王「よしもう一回行ってみよう」。

劉「えつ、またいくのですか。先生の怖いもの知らずにもあきれます」。



王「鬼にたぶらかされて引き下がるのは悔しい」。

再び進みます。先程の自分の足跡を辿りつつも、決して曲がらずに真直ぐに進むことを心がけていきますと、またもぞっとしましたのは、確かに足跡を追ってきましたのに、ぷつぷつとそこから先が消えています。右にも左にもなく、引き返した痕跡ありません。

王「これは妙だ」。

燭を左右に動かして、さっきは自分はどこにいったのだろうかと遠くを探ります。明かりが届く限りの奥を照らし、何度見ても一切の痕跡がありません。燭を横に動かして、奥に光が及ばなくなった瞬間に、はるか彼方に、ぼつと淡く浮かび出るものがございます。

はつと気づいて、燭の光を向けますと、それは消えてしまいます。光をすつと遠ざけるとまたかすかに見えます。

振り返ると、劉婆さんはしきりに呪文を唱え、王先生の袖を引きます。

劉「先生、ここまでです。明日にしましょう」。

王先生はかえつて度胸を決め、劉婆さんの手を払ってずかずかと歩みます。奥まった先に淡く見えたのは陳淑文その人。膝を折つて床に座し、両手を背中の後ろに組み、顎を上げてかっとな井を見上げています。膝もとに羊の肉と酒があります。

王「陳さん」。

大きく開いた口からは声は聞かれず、息は通っていません。

人々が周りを囲みます。件作行者はこわごわ死骸には触れずにあちこちを照らし見て、

件「どこにも血が流れておらず、傷もありません。まわりの埃には乱れが一切ありません。争った跡はありません。どうしてここに死骸があるのか、どうして死んだのか、全くわかりません」。

武三は呪文を繰り返してから、

武「まさしくこれは陰府のお裁きでありましょう」。

**王**先生と劉婆さんが長屋の近くにまで帰ってきましたのは、そろそろ夜が明けようとする時分。さすがに元宵節の燈籠も、このころにはほとんどが消え、人通りも途絶えています。今日十八日の夜が燈籠見物の最終日で、収灯と申しまして、祭りの終わりの独特の寂しさがございます。

一月半ばは春とはいいまでも、冷え込みは厳しく、風の冷たさに背を丸め、二人は足早に歩きます。魚巷城からずっと無言です。

ポクポクポク。

静まり返った町のどこかからか、木魚の音が風に乗ってほのかに聞こえてきます。

王「ああ、もう朝か」。

別の方角から、カチャカチャカチャと、鉄の札を叩き合わせる音がします。都の人に夜明けの訪れを知らせる報曉頭陀（ほうぎょうずだ）が歩き始めたのでございます。報曉頭陀は、大概はお寺で修行する者で、これを一つの仕事と

してなにがしかの収入を得ております。

王「どうにも寒くてかなわん。あそこの趙さんのところで、熱い粥でも啜ろうとしようか」。

馴染みの小さな酒店が、もう商売を始めています。

報曉頭陀が木魚や鉄の札を叩いて町を回りますと、小商人たちが起き出し、それを客とする食べ屋なども店を開けます。宋の都というのは、元宵節に限らず、一日を通じて活動を休止する時間がほとんどなく、この店なども、親爺はいったいいつ休んでいるのか不思議なくらいに、時刻に合わせて様々な飲食物を商っております。

一碗の粥に腹が温まりますと、ようやく人心地がつかまして、劉婆さんは、親爺に聞こえないような小声で、

劉「まったく恐ろしいものを見てしまいました。あたしも長いこと護符を売ってききましたけど、実際に鬼に取り殺されたのを見たのは初めてです。世の中にはああいうことがやっぱりあるのでございませうなあ」。

王「まあ、あるのだろうか」。

劉「先生の度胸のよさにはびっくりです」。

王「少しは見直したかい」。

劉「あんなものを見て、あたしたちにも何か危害が及びましようか」。

王「心配だったら、商売道具の護符を体中に貼ったらどうなのかい」。

劉「蘭英さんに悪いことをした覚えはあたしにはありません。でも、あちらがどう思っているかはわかりません」。

王「あの人の仕業だと思っているのかい」。

劉「そうではないのですか」。

王「あの人はやはり死んだのだろうか」。

劉「だって、生きている者に、あのようなことができましようか」。

王「篋が消えていただろう。銭が要るのは鬼よりも生きている者の方ではないのかい」。

劉「川に落されたけれども助かって、篋を取り戻しにきたのですか」。

王「陳さんはもともと気が弱い。あの人にちよつと脅かされ、恐ろしさのあまりに息が絶えたのではないだろうか」。

劉「でも、汴河の急流に落され、それも酔っていて、助かったりするでしょうか」。

王「難しいだろうな。あの人は助からず、しかし鬼の仕業ではないとすると、あやしい者が四人ばかりおるな」。

劉「陳さんを殺しそうな者ってことですか」。

王「宝がたくさん入った篋は誰だっけほしいだろう。篋があるのを知っているのは、まずはこの私とあんただ。我々二人が共謀すれば、陳さんを消すくらいできるだろう」。

劉「冗談いっちゃいやですよ。身に覚えがありません。先生がなさったのなら、わかりませんけれど、一緒にしないでください。口止め料ならたつぷり遠慮なくいただきますけど」。

王「次にあやしいのはあの棒担ぎだ。路地の奥に入ってしまったのを見たのは

あの男だけだ」。

劉「篋を奪うのだったら、道の途中で盗って逃げれば簡単ではないですか。あそこでのんびり昼寝などしているはずがありません」。

王「それもそうだ」。

劉「ですから、あれはまさしく陰府のお裁きです。武さんの言った通りです。だってそうでございましょう、蘭英さんが川に突き落とされて、陳さんがそのままお役人でいられたら、道理が通りませんもの。この世のお裁きが正しく下されないので、蘭英さんはあちらの世の王様に訴えたのです。この世のお裁きは間違えることがあっても、あちらの世では決して間違えません。陳さんはああして陰府に召され、あちらの罰を受けたのです」。

王「筋の通ったよい話だ。それを聞いて、悪いことを思い留まる者が少しでもいればまことに結構であろうからな、この件はそういうことにしておくのがよさそうだ」。

劉「そうですね。それで、四人目というのは誰なのですか」。

王「もうよかろう。陰府のお裁きで終わりにしておこう」。

劉「ご自分からおっしゃっていなながら、最後は黙ってしまふのですか」。

王「聞きたいのかい。それこそ我々二人だけの内緒事だ。お役人も病死ですませたのだから、ほじくり返すのはよしにしよう」。

劉「ええ、誰にも言いません」。

王「そなたは何とも思わなかったかい。ほら、陳さんのお内儀だ」。

劉「本当のおかみさんの方ですか。さすがにしつかりしたお人だと思えました。いっさい取り乱すこともなく、このあたしにまで丁寧にお礼をおっしゃって下さいましたから」。

件作行者が遺骸を調べますと、不可解なことばかりで、鬼に魂を抜き取られたに違いないということになりましたが、そんなことでお上に届けるわけにはいきませんので、当たりさわりなく、病死ということに決めました。陳叔文は一人で空き家に入り込み、羊の肉と酒で何か祈祷のようなことをしている間に、不意の病で死んだということにしたのです。事が決まって、棒担



ぎが走って陳叔文の妻が呼ばれました。妻は、夫が空き家に入り込んだことに何の心当たりもなく、件作行者の説明に一応納得した様子で、後は死骸を引き取る手筈を肅々と進め、それが完了したのが夜中過ぎでした。燈籠で華やかに飾られた町を陳叔文の遺骸が運ばれていくのは、何とも哀れなありさまでしたが、妻は人足たちに賑やかな表通りを避けるよう指示しつつ静かに去っていきました。その間、王先生と劉婆さんはずっと立ち会っていたのですが、崔蘭英のことは黙して語りませんでした。

王「何もかも心得すぎているように感じたのだが」

劉「本当は動転していて、実は何もわからないままに、件作行者のいいなりになっていただけなのかもしれませんね。件作行者にはとかく性質の悪いのがありますから、妙な因縁を付けられて夫の名に傷がつき、面倒なことになるのも困まると、言われるがままになっていたのではありませんか」。

王「実は全部わかっていたのではなからうか」。

劉「蘭英さんのことですか」。

王「あのお内儀さんなら、ありそうだ」。

劉「では、嫉妬ですか。でも、何も殺さなくてもいいでしょうに」。

王「篋がなければ」。

劉「とかくお金ですか」。

王「まあ、あれこれつまらぬ詮索をするより、鬼のせいにしておこう。それがやはりいい」。

先生は立ち上がって、店の親爺に、

王「これで二人分に足りるかい」。

趙「へえ、結構でございます」。

劉「まあ、先生、あたしの分までいいのですか」。

王「お互い貧乏暮らしでも、たまには見栄を張らせてもらおうかい。昨日の昼過ぎから今朝まで付き合ってもらって、粥一杯では安すぎよう」。

劉「変わった経験もさせていただき、御馳走さまです」。

王「とかく人というものはわからないことをするものだな」。

先生は店を出ながら親爺に向かって言います。

趙「へえ、さようでございますな。これであつしも都には随分と長くなりましたが、人ほど恐ろしいものはありません。それに比べたら鬼の裁きなど怖くもなんともありません」。

王「何だ、聞えていたのか。すべて内緒話だ」。

趙「もちろんでございますとも。お客様方のお話は、何を聞いてもすぐに忘れることにしております」。

店を出ると、空が明るくなり始めています。

王先生は思わず大あくび、

王「燈籠見物でもないのに、とうとう夜明かしをしてしまった」。

劉「今日は、素読のお勉強をしながらうつつかり居眠りをして、いつもと逆に、お弟子さんたちに叱られませんように」。

というところで、皆さまも眠気に襲われるところでございましょうから、本日のお話はこれまで。御退屈さまでございました。